

青葉の笛

松口月城

一の谷の軍営遂に支えず
戦雲収まる処残月有り

平家の末路人をして悲しませ
塞上笛哀吹きし者は誰ぞ

(唱歌)
一の谷の軍破れ
暁寒き須摩の嵐に

討ちれし平家の公達あわれ
聞えしはこれか青葉の笛

【作者】松口月城(一八八七〜一九八一年)(明治二十年〜昭和五十六年)。名は栄太。月城と号す。福岡市に生まれる。幼少より秀才の誉れ高く、

熊本医学専門学校を卒業、十八歳にして卒業して医者となり、世人を驚かせた。当時、久留米出身で熊本に住んでいた詩壇の重鎮・宮崎来城に漢詩を学び、以来この道を極め福岡に「月城吟社」を経営し、現代詩壇の雄として活躍、書画にも秀でていた。九十五歳で没。「月城詩集」がある。我が「岳精会会詩」の作詩者でもある。

【語釈】*青葉之笛：平敦盛の持っていた笛の名前。竹製の横笛。 *一の谷：兵庫県神戸市の鉄拐山(てつかいざん)が海に迫(せ)り出した所* 塞上：「塞」はとりで。ここでは平家の陣営。「上」はほり。 *末路：一族が滅びゆく哀れな最後

【通釈】一の谷の合戦で平家は奮戦したものついに支えきれず、その後の平家一族の哀れな最後は聞く人を悲しませる。その一の谷の戦いが源氏の勝利のうちに終息したころ、明け方の空には残月がかかっている、平家の陣営のあたりから聞こえてくる笛の音がある。こんな折、哀愁を

誘う見事な笛を吹くものはいつたい誰なのであろう。